

「令和2年度 AG5 大連日本人学校の取組」

～バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成を目指して～

1 大連日本人学校の概要

大連日本人学校は、小学部70名、中学部20名、全校児童生徒で90名が在籍する日本人学校です。本校は、国際結婚の家庭が多く、日本語も中国語も高度なレベルで理解している児童生徒の割合が非常に高いという実態があります。また、どの学年にも学習規律が定着しており、落ち着いた学習環境の中で教育活動を行っています。全校中に互いに認め合い、支え合う支援的な雰囲気があふれているのが特徴です。

さらに、国際結婚家庭の児童生徒は比較的異動などによる転出が少ないため、たくさんの児童生徒が長い期間在籍して活躍する様子が見られることも、大きな特徴の一つです。

2 教員研修のプログラム開発について

まずは、「教員研修のプログラム開発」という観点から2年間の取組を振り返り、プログラム開発のためのポイントとなる要素を考察しました。

(1) 学校の体制づくり

① 学校長のリーダーシップ

今年度は、新型コロナウイルスの影響により、新赴任者がなかなか赴任できないことに加え、学校行事が中止になったり、オンラインでの授業が続いたりなど、厳しい状況が続きました。その中で、AG5への取組もなかなか推進することができませんでした。

しかし、10月に学校長が赴任すると、体制づくりの見直し、共通理解を図るための全体研修の実施など、AG5への取組は大きく前進しました。11月のAG5オンライン合同研究会（マニラ日本人学校・青島日本人学校・大連日本人学校など）には、全教員が参加することとなりました。

厳しい状況下でのAG5の取組を通して、学校の教育活動において校長のリーダーシップは非常に重要であることを改めて理解しました。

② 研修と関連付ける

令和二年度は、校内研修（主題研究）とAG5の活動について、AG5のテーマを学校の研究主題と一致させ、分掌に位置づけた上で研修との一本化を図りました。また、本校の「特別支援研修」による「個別の支援を必要とする児童生徒の情報共有」も活用しました。

分掌に位置づけることで、組織として実践を行えることや継続性が期待できます。

ただ、今年度は7名の教員が赴任できないなど、校内研修自体を十分に実施することができなかったため、効果を検証するまでには至りませんでした。

③ コーディネーターの活用

大連日本人学校は、小学部1～6年・中学部1～3年があり、9年間の義務教育を行って

ます。各学年によって発達段階が大きく異なり、教育実践の目標・課題・方法も変わります。

校内研修を実施することができない状況の中、コーディネーターを活用することにより「情報集約する」ということには一定の成果がありました。しかし、教職員への周知・交流を進め、共有化を図ることには限界があり、コーディネーターの活用以外の手立てが必要になると考えられます。

(2) 日本語力に関する実態・課題の把握

①実態・課題を把握する「ものさし」

- (i) 令和元年度～2年度「DLA〈はじめの一步〉」の「語彙チェック」を実施
- (ii) ②令和2年度「JSL 評価参照枠」と『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料』の活用

昨年度、本校の児童生徒の日本語能力を把握するため、全校の児童生徒を対象に「DLA〈はじめの一步〉」の「語彙チェック」を実施しました。

その結果、本校の日本語の語彙を理解する力は非常に高いということがわかりました。

今年度も、小学部1学年に「語彙チェック」を実施し、全体的には語彙の理解力は高いものの、数名の児童の落ち込みを見つけることができました。

また、今年度は「JSL 評価参照枠」とそれをもとにした『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料』の一部を活用し、日本語支援の観点から9学年(小1～中3)全ての学年の実態・課題について把握・共有化を図りました。その結果、9年間の教育活動の流れを共通理解することができました。

以上から、実態・課題を把握するため共通の「ものさし」を活用することは、目標設定や実態・課題の共有化に効果的であると考えられます。

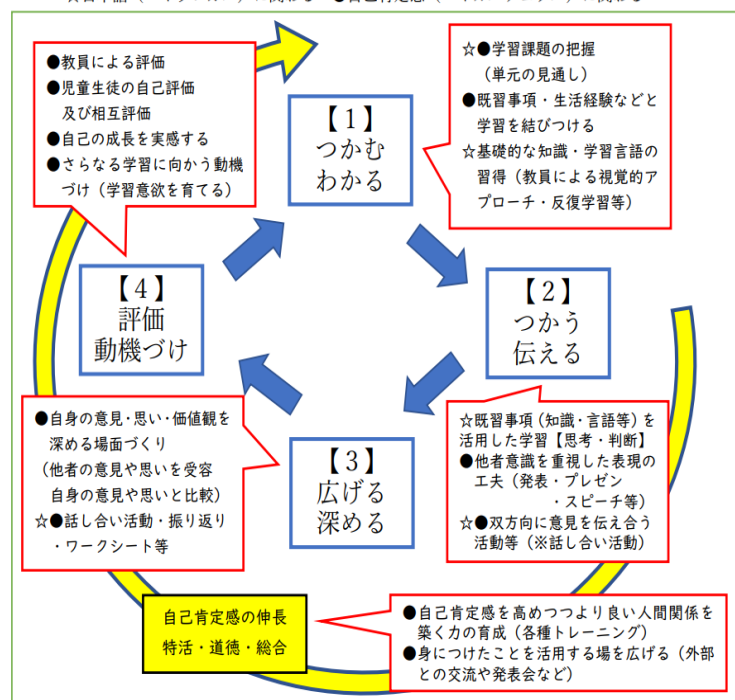
②実践の共有

実践の共有にあたり、ポイントとなることを視覚化し、教員の共通理解を促進するため構造図を活用しました。(右図)

「JSL 評価参照枠」及び『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料』の一部を活用し、本校の9学年の実態把握を行ったのち、それぞれの教員がどのような課題意識を持ち、重点的に実践を行っているかについて、効果的に共通理解を図る一助とすることができました。

◆研究の構造図(単元づくりについて)

☆日本語(バイリンガル)に関わる ●自己肯定感(バイカルチュラル)に関わる



3 バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成をめざした実践について

(1) テーマの設定

AG5の目標は「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発」です。

その目標を達成するため、大連日本人学校では令和元年度より「劇的に変化する国際社会の中で、生涯にわたって自身の良さを生き生きと発揮できる子どもの育成」というテーマを設定しました。AG5の取組が二年次となった今年度もこのテーマのもと実践を進めました。

(2) 今年度の状況について

今年度は、新型コロナウイルスの世界的な影響により、本来4月に赴任する予定の7名の教員が10月まで赴任することができませんでした。また、児童生徒が登校することができず、オンライン授業で教育活動を実施する期間や、日本国内で待機する教員によるオンライン授業・日本国内から大連に戻れない児童生徒がオンラインで授業に参加する期間がありました。

そのような状況の中で、「子の学びを止めない」を合言葉にして、教職員は様々な工夫を重ねて教育実践に取り組んできました。

(3) 本校の日本語支援（日本語語彙）に関する実態の把握

①「DLA〈はじめの一步〉」の「語彙チェック」を実施

昨年度、本校では児童生徒の日本語能力を把握するため、全校の児童生徒を対象に「DLA〈はじめの一步〉」の「語彙チェック」を実施しました。

その結果は、小学部1年生は85%以上、小学部2～4年生は95%を超える正答率となりました。また、小学部5～6年生及び中学部1～3年生では、ほぼ100%に近い正答率となりました。

以上の結果から、本校の日本語の語彙を理解する力は非常に高いということがわかりました。

今年度は4月に入学した小学部1学年のみ「語彙チェック」を実施しました。平均正答率が80%を超えるなど、全体的には昨年度同様に語彙を理解する力が高いことがわかりました。また一方で、本年度編入学した国際結婚家庭の数名の児童の語彙力が低いことを確認することができました。

②「JSL 評価参照枠」と『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料』の一部（目標項目）などの活用

文部科学省が作成した「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」の中には、子どもの日本語の力を段階分けした「JSL評価参照枠」があります。大連日本人学校では、この評価参照枠とそれをもとにした『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料』の一部（以下「目標項目」）を共通の「ものさし」として活用し、各担任に聞き取り調査を行い、本校の実態を把握しようと試みました。

※【資料1】「目標項目・大連Ⅰ～Ⅲ」参照

その結果、全ての学年が第5ステージ以上の項目を課題としていることから、DLA 語彙チェックの通り全体的に本校の児童の語彙力・日本語能力は高いと言えます。

さらに、学年・学級のメンバーによって若干の違いは見られるものの、小1～2は第5ステージの項目を課題とすることが多く、小学年が上がるにつれて徐々に6ステージの項目が多くなっていくことがわかります。

したがって、小1～2では、表現活動へつなげていくことを目指し、まずは学習言語を確実に習得するため、繰り返して定着を図ることや交流の中で語彙のニュアンスの微妙な違いを理解していくなど、日本語を丁寧に指導する実践の必要が生じると考えられます。

小3～小6では学年が上がるにつれて日本語能力が高まっているため、学年の実態（得意・不得意）に合わせて必要な基礎の定着を図り、様々な表現活動の中でさらなる学習言語能力を高めることを目指す実践が必要となります。

中学部では、ほとんどの生徒は第6ステージを達成できていると判断できます。小学部における効果的な教育実践の成果により、土台となる学習言語能力が高まっているためだと考えられます。したがって、中学部ではより高度な日本語能力を目指すとともに、多様な価値観を受け入れつつ自身の考えを確立して主張・調和していく力の育成を目指す必要があると考えられます。

以上の9年間の教育実践の流れ・継続により、本校の目標「劇的に変化する国際社会の中で、生涯にわたって自身の良さを生き生きと発揮できる子どもの育成」は達成できると考えられます。

（４）課題と取組の手立て

①表現活動の充実 ～日本語力の向上を目指して～

DLA 語彙チェックを実施した結果によると、本校の児童生徒は「日本語語彙の理解力が高い」と捉えることができます。そこで、本校では目標項目を活用してそれぞれの学年・発達段階に応じて課題を捉え、「表現活動」の充実を図り、日本語語彙の確かな定着を目指すことにしました。

それぞれ発達段階における指導の目標・重点は、以下のとおりです。

【小学部1～2年】使ってみること（表現活動）で更なる定着を目指し、まずは語彙の知識を広げる

【小学部3～6年】語彙を活用し、高度な表現活動を通して確かな定着を図る

【中学部1～3年】既習事項や共通理解したことを土台に自身の考えを持ち、伝え合うことで考えをより深める活動に取り組み、社会生活に必要な能力の育成を目指す

②自己肯定感を育てる ～将来直面するであろう揺らぎに対して～

多様な価値観があふれ激変する社会の中で良さを発揮するためには、自己肯定感が基盤になると私達は考えました。したがって、本校のテーマにもある「児童生徒が生涯にわたって良さを発揮する」ためには、自身の良さに気づき自信を深めること、つまり「自己肯定感」の伸長が必要であると考えます。

また、これから出会う新しい環境・新しい人間関係の中で、それぞれの良さを発揮するためには、「相手の立場や価値観を受容した上で、自分の考えや思いを適切に効果的に伝える力」

が必要です。近い将来、激しく変動する国際社会の中で間違いなく直面するであろう揺らぎに対して、自己肯定感は生涯にわたって良さを発揮するための土台になると考えられます。

語彙を理解する力や表現力などの確かな日本語能力の育成。そして、違いを受け入れた上で自信を持って良さを発揮するための自己肯定感の育成。バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成を目指す上で、本校は以上の二点の育成が両輪として重要であると考えました。

次の【図1】は、本校が取り組んできた「単元・授業づくり」の流れを示した構造図です。各学年の発達段階・課題に対応した教育実践の重点について、視覚化を図りました。

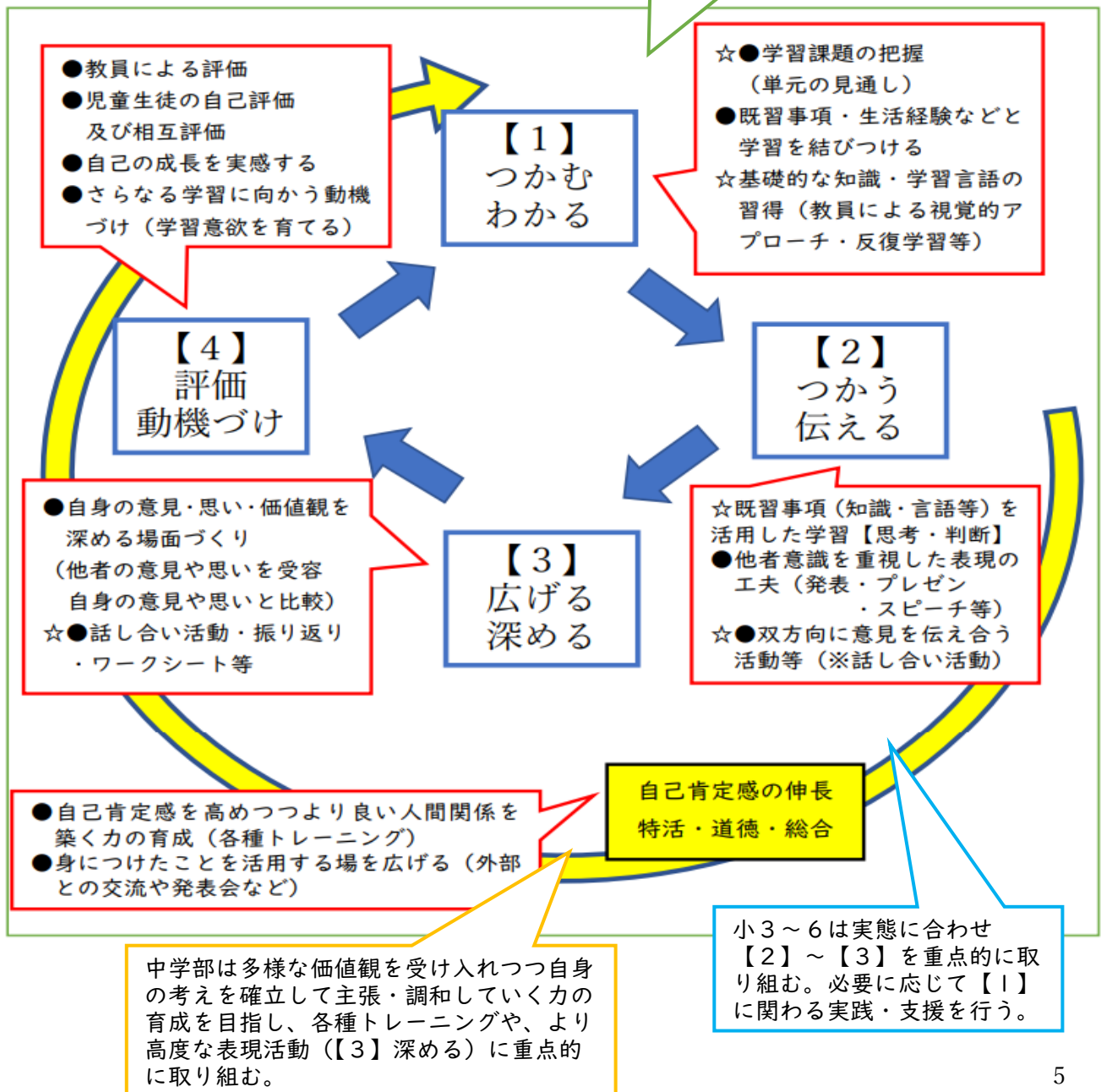
◆研究の構造図（単元づくりについて）

☆バイリンガル（日本語）に関わる

●バイカルチュラル（自己肯定感）に関わる

小1～2は【1】を重点的に取り組み、身につけたことを【2】【3】の活動で生かす

【図1】



(5) 実践紹介 I

①小学部2学年 国語科の実践（授業者：安藤久美子）

小2の国語科の授業では、「擬音（オノマトペ）」を題材にした実践を行いました。

教科書の付属教材のワーク「ようすがわかることば1」に取り組む中、以下の手順で雨の様子を表す擬音について理解を深めるように実践を行いました。

- 〈1〉それぞれ、日常生活を振り返って雨が降っている時のことを思い出させ、交流を通していろいろな雨があることの共通理解を図る。【生活経験との結びつき】
- 〈2〉雨の様子を写真や画像で提示しながらイメージをふくらませ、ワークシートに記入させる。【視覚的アプローチ】
- 〈3〉インターネットの動画・音源などを活用して実際の雨音を聴かせ、音の表現（擬声語）を意識させながらワークシートに追記させる。【聴覚的アプローチ】
- 〈4〉児童がそれぞれ書き入れた言葉について、交流を行う。それぞれ言葉のもつ微妙なニュアンスの違いについて、交流の中で理解を深めるように指導を行う。

〈1〉生活経験と言葉の結びつきを図り、それぞれの児童が経験してきた雨の様子を思い起こさせて、交流を行いました。激しい雨や霧雨のような雨など、雨にもいろいろなタイプがあることについて交流を通して共通理解を図りました。

〈2〉更にイメージを明確にするため、写真・画像を提示して視覚的アプローチを行いました。今年度の夏、大連には珍しい大雨のため校舎前の道に水が氾濫し、川のようになったことがありました。その時の様子を画像で見せ、「大雨」を想起させました。その上で、それぞれが雨の様子を表す擬音についてワークシートに書き出しました。

〈3〉擬音（擬声語）を意識させるため、インターネットの音源などを活用して実際の「雨音」を聴かせ、聴覚的アプローチを行いました。その上で、思いついた言葉をワークシートに追記させました。

〈4〉児童が書き出した言葉について、交流を行いました。「ザーザー」「ポチャポチャ」「ポツポツ」「ボチャボチャ」など、それぞれの言葉がどのような雨の様子を表しているか、微妙なニュアンスの違いについて共通理解を図りました。また、「ざらざら」「ぱたぱた」「ざぶざぶ」など、雨とは少し離れた擬音について、それぞれの言葉がどのような場面を表しているか、理解することができました。

さらに、ワーク「ようすをあらわすことば2」に取り組み、3つの絵を見て擬音を用いた例文を考え、交流を行いました。「コンサートの様子」など、多くの児童が経験したことのない場面もありましたが、絵が表す場面のイメージを共有できるように、丁寧な指導を行いました。「ようすをあらわすことば1」での学んだことを生かし、日常生活の中でも活用する擬音について、実感を伴いながら理解を深める様子が見られました。

この学級は常日頃から家庭での学習課題として作文・日記に取り組んでいます。「もしもどこでもドアがあったらどこに行く?」「もし朝起きて大人になっていたら何をする?」など、児童が思いつきやすい題材で220字程度の文章に取り組んでいます。この授業の後に擬音を積極的に用いて表現する児童が増えるなど、学習の成果が見られました。

生活経験との結びつきを図り、視覚的・聴覚的アプローチを活用し、実感を伴いながら理解を深めるように指導を行った。

1 ようすをあらわすことば

「雨が、に入ることばを書きましょう。
「雨が、ふっています。」



どれくらいか
たくさんふっています
やばいほど大きく
ものすごいほしく
少し

ことばのひびき
かこうごらポツポツ
ビチビチ バッシャバッシャ
しとしと ホチャホチャ
パラパラ ビチャホチャ
せびやせびや ぱたぱた

たとえをつかって
木のははみたりにふって
いる。かみみだりにふって
いる。シャワーみだりにふ
ている。

1 ようすをあらわすことば

「雨が、に入ることばを書きましょう。
「雨が、ふっています。」



どれくらいか
ほんの少し
たくさん
おそろしいほど
ほしく、いなる
ものすごい

ことばのひびき
バシバシ
ポソポソ、ホチャホチャ
ザーザー、ホチャホチャ
パチパチ、アピピ、アピピ
ビチャビチャ
シヤシヤ、シヤシヤ
しとしと

たとえをつかって
雨が、シワみだりにふって
いる。
雨が、ゆぎのようたふ
ている。
雨が、風の水たにふって
いる。
木が、木が、おちるよう

2 ようすをあらわすことば

三枚の絵について、ようすをあらわすことばをつかって書きましょう。



お打の子の前でドンと大きなオムライスがある。
スプーンでオムライスをつつくと、ふわふわした。
山のように大きなオムライスがある。

ねまがすくすくやると、とろもちよさをうに、おている。
ゴキブリの上におんとすわわわわわわ。
日なたに、イチョコンとねている。

女の子がステージに立って、ニコニコと歌っている。
うんざんがはくしをしてよろよろしている。

②小学部4学年 国語科の実践（授業者：T1 塚田志保、T2 梅垣美里）

小4の国語科の授業では、物語文の読解を行い、理解したことをもとに登場人物の視点から物語のリライトを行う実践に取り組みました。

まず、单元の中で物語文「ごんぎつね」の読解を行いました。次に、各授業を通して理解したことをもとに、各場面での「ごん日記」と「兵十日記」を書きました。

授業者は、それぞれの児童の実態に合わせて丁寧な指導を行いました。ある児童は文を書く際、漢字を使わずにひらがなで書きたがる傾向が強く、学年相応の漢字や学習言語を使って書くことの指導を重点的に行いました。また、段落構成に課題が見られた児童には、接続する言葉を活用し、段落間のつながりに留意して書く指導を重点的に行いました。その結果、「そして」「だから」などの接続詞を活用し、段落相互の関係や文章の流れを考えて作文に取り組むことができるようになりました。※下の作文を参照（どちらも国際結婚家庭の児童）

また、授業者は既習事項の確認や日記の作成の取り組みの中で、クラスの支援的な雰囲気を生かし、積極的に教え合う場面の設定に努めました。単に教え合うだけではなく、児童同士でできるだけ同じイメージを共有した上で、実感を伴った理解できるように、次のような手立てを用いました。

(i) モデル文の提示 (ii) 視覚的アプローチ (iii) ロールプレイ

(i) 「モデル文の提示」

それぞれの語彙をどのように使うか、教員がモデル文を提示した上で、他にはどのような使い方があかなどを伝え合う活動を行いました。たとえば、「ワクワク」などの擬音についてモデル文を提示し、他にはどのような使い方をするかについて交流させることにより、知っているものの活用できなかった語彙について実際に表現に使う児童が増えました。また、段落相互をつなぐ言葉（接続詞・「だから」、「しかし」など）の指導は、児童の書いた文章をモデル文として提示し、児童の交流の中から段落相互の関係から適切な接続詞に気づけるよう指導を行いました。

(ii) 「視覚的アプローチ」

場面や情景のイメージを共有するために、画像や資料集の写真などをモニター・電子黒板に映して、視覚的アプローチを行いました。ごんぎつねの場合は、「袴」や「びく」などの服装・生活用品について知らない児童が多く、場面の細かな状況を理解するために大きな効果がありました。場面のイメージを共有した上で、言い表す言葉を教え合うことで、語彙の実際の活用の仕方について、理解を深めることができました。

(iii) 「ロールプレイ」

登場人物になりきり、物語のロールプレイを行う活動を通して、場面や情景のイメージの共有を図りました。実際の場面を演じることにより、登場人物の心の動きを捉え、状況に即して自然な表現がしやすくなりました。このロールプレイをもとに教え合いの場面を設定することにより、その言葉を活用した表現について実感とともに理解を深める児童が多く、日記の作成に活かされていました。

以上の手立てによる効果は二点あると考えられます。

一つ目は、知ってはいても表現の中でどのように活用するかを知らなかった言葉について、児童が実感を持って理解することができるという点です。イメージを共有して教え合うことにより、実際に表現の中で語彙をどのように使うか理解を深め、多くの児童が自然な形で表現ができるようになる様子が見られました。

二つ目は、自己肯定感と学習意欲を高めつつ、理解を深めることができるという点です。友人同士が気軽に教え合うことで、学習で理解を深めた言葉を積極的に活用しようとする児童が増えました。日本語の理解力に課題がある児童も、リライトに取り組む中で「ドキドキ」「わくわく」という擬音の活用を思いつき、効果的に使っていました。さらに、しっかりと書けたことに自信を持ち、自己肯定感、学習意欲を高めている場面が見られました。

文をひらながで書きたがる児童に対して、既習の漢字を使って書くように指導を行う。ロールプレイを活用した友人による教え合いの場面設定により、擬音を効果的に使えるようになり、意欲を損なうことなくリライトの活動に取り組むことができた。

ごん日記

い、ばいいたずらをして日
ごん

今日ぼくは三日もひり続いた雨がわんたの
び、川に行きました。雨の間、ずよあな
中にしりがみこんでいたので、今日は何かお
もしろいいたずらかしたいな。と、うさうさ
してしまいました。

そこに兵十が川で魚をとっていたので、か
くの中の魚を全部にがしてやりました。と、
び兵十に見つが、てが、くろししたげど、つか
まらずに帰。てが、あました。か、ぼりいた
ずるは、このドキドキ、あわわする感じが最
高です。

次も兵十が村の人をも、とも、と、ごま
せたいです。おして、ぼくは決意しました。

明日は村の人のおかずや大事な物をもりす
たずらで村の人がぼしてあるひとんをもち
いたずらをしてわらう。

ごん日記

うなぎをぬすんだせ
今日おれは川へ行。た。水かどつとまして
いた。そこおれは兵十を見かけた。兵十は
魚をつかまえていた。

そしておれは、いと、いたずらかしたく
な。た。おれは、おれは、おれは、おれは、
はりきりあみのかかっている所より下手の川
の中を自かけて、ぼんぼん投げこんだ。

いさばんしまいに太いうなぎをつかみにか
か、たんだけど、なにしろぬるぬるとすべり
ぬけるから手ではつかめなかつた。

だからおれは頭をぶくの中につっこんで、
うなぎの頭を口にくわえた。うなぎはキョッ
といて、おれの首ハマき付いた。

おれはほつとして、うなぎの頭をかみくだ
き、やつと外して、あなの外の草の葉の上
のせとおいた。

兵十は今ごろおこっているだろうな。
いたずら大成功。

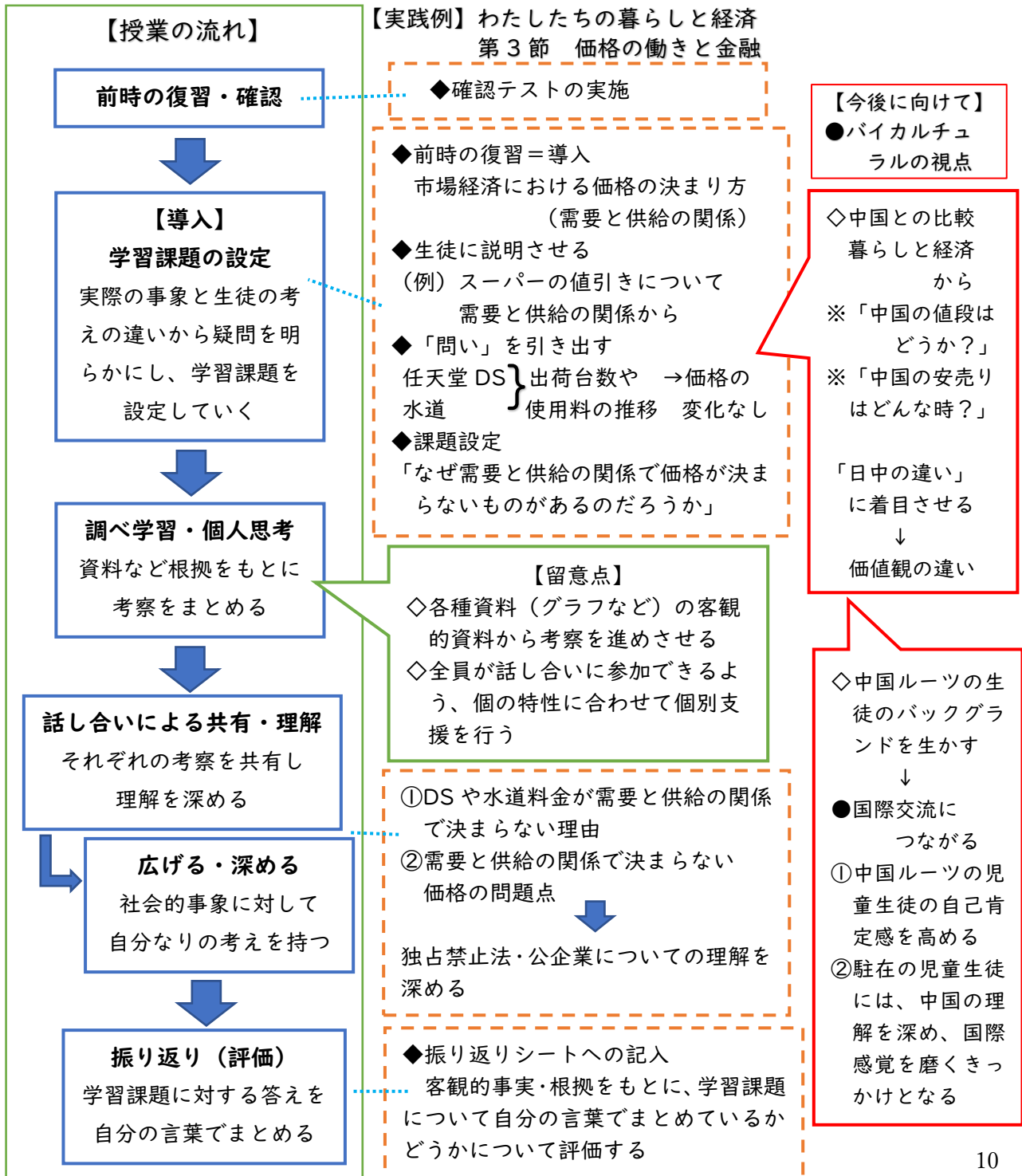
段落相互の関係を考えて書けるように指導を行う。特に、接続詞を重点的に指導することで、文章の流れを考えながら取り組むことができた。

③ 中学部 3 学年 社会科の授業実践（授業者：金野教恵）

中3の社会科では、対話的な学びの中で考えを広げ深める授業実践を行ってきました。

以下のような授業展開を基本的なパターンとして、対話的な活動を活用しました。自身の考えを社会的事象に関わる語彙を用いて適切に表現したり、他者の考えに触れて考えを広げたりと、より高度な表現活動に取り組みました。

今後は、バイカルチュラルの視点から、国際結婚家庭（中国ルーツ）の児童生徒のバックグラウンドを生かす場面を増やしたいと思います。彼らの知識を生かして日中の違い（価値観の違い）を捉えることで、中国ルーツの児童生徒の自己肯定感を高めつつ、在外の児童生徒が中国の理解を深め国際感覚を磨くきっかけにしたいと考えています。



④ 中学部 1～3 学年 特別活動・総合的な学習の時間の実践

(授業者：北村雅俊、松本智子、濱崎渚、中学部の教員)

中学部では、特別活動の時間を使い、違いを受け入れ自己肯定感を高めるトレーニング（コミュニケーションスキル・ソーシャルスキルのトレーニング）に取り組みました。今年度は、日本国内で待機している教員や日本から大連に戻ってこない生徒のため、対面・オンラインを組み合わせた授業実践となりました。※【資料2】「トレーニング指導案」参照

【1 学期】

- ◇ 「積極的な聴き方」(良い聴き方・傾聴トレーニング)
- ◇ 「エゴグラム」(自己理解・他者理解)
- ◇ 「プラスのストローク」(コミュニケーション・よりよい人間関係)
- ◇ 「怒りの温度計」(自己理解・他者理解・アンガーマネジメント)
- ◇ 「上手な断り方」(自己表現・アサーション・自己防衛)
- ◇ 「一文表現」(SNS などにおける自己表現・他者理解)

【2 学期】

- ◇ 「上手な指示の出し方」(自己表現・他者理解)
- ◇ 「砂漠の救助」(合意形成・他者理解・アサーション)

まず、新入生である1学年のために「積極的な聴き方(傾聴)」のトレーニングに取り組みました。良い聴き方は話し手との信頼関係を築くことや、「目を見て聴くこと」「うなずきながら、共感を示して聴くこと」「積極的に質問すること」など傾聴の具体について実感を伴いながら理解する様子が見られました。

「エゴグラム」の取組では、自身の性格の特徴について振り返りました。また、交流を通して、よく知っていたつもりの方の意外な一面や、友人の目から見た自身の良さに気づかせることができました。

「プラスのストローク」では、相手を言葉でほめる(評価する)ことに取り組み、その難しさや有効性について学びました。普段から相手の良さを見つけることの大切さを実感させることができました。また、身近であればあるほど、プラスのストロークは難しくなるので、意識して伝えようとする姿勢を育てる一助となりました。

「怒りの温度計」では、自他の怒りの感じ方の違いや、アンガーマネジメントについて学びました。特に、感情的になりやすいことを自覚している生徒は、クールダウンして客観的に考え、前向きに切り替えることの大切さを実感していました。また、ため込まないために適切に伝えるなど、表現することが発散につながることを理解させることができました。

「上手な断り方」では、①謝罪・感謝、②理由を伝える、③代案の提示、という3つの段階について、ロールプレイを中心に学習をしました。実際にやってみることでその難しさを実感するとともに、よりよい人間関係を築くために相手の心情をイメージすることの大切に気づかせることができました。

「一文表現」では、短い言葉で伝えることの難しさから、SNSにおいて誤解が生じやすいこ

とトラブルを避けるために心がけるポイントを学ばせることができました。夏休みを迎えるにあたり、生活上気をつけることと関連付けて、指導を行いました。

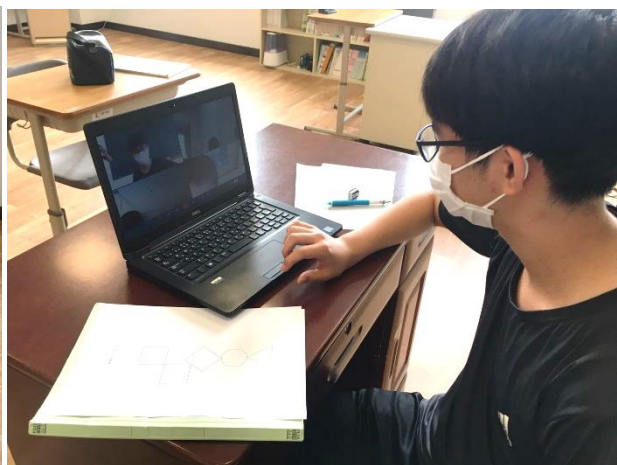
「上手な指示の出し方」では、一方通行の伝達が難しいことや、よりの確に伝えるためには双方向の伝達が効果的であることを実感させることができました。また、積極的に質問することなど、学んだことを学校や家庭生活の中で取り組む意識が育っている様子が見られました。

「砂漠の救助」では、自他の価値観の違いを受け入れた上で、自分自身の考えを適切に主張し、グループとしての考えをまとめていく合意形成を学びました。他者の意見を聞くことで自分の意見が深まることを実感した生徒や、自分が意見を押し通してしまう傾向に気づき合意形成に挑戦する意識をもつ生徒など、それぞれの生徒が自他の違いを受け入れることや合意形成を図ることの重要性を理解することができました。

これらのトレーニングの成果を、各教科の高度な表現活動と関連付け、さらにより社会生活に近い実際の場面で発揮させる経験を通して、バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成につなげていくことができると私たちは考えています。



「上手な断り方」ロールプレイより



「上手な指示の出し方」オンラインで交流



「上手な断り方」全体へロールプレイの例示



「砂漠の救助」合意形成は難しい

4 新たな課題と取組の手立て

(1) 今年度の状況における新たな課題Ⅰ「子の学びを止めない実践」

① ICTを活用した教育実践について

大連日本人学校は、新型コロナウイルスによる影響のため、昨年度の2020年2月頃からオンライン授業に取り組みざるを得ない状況が生じました。

【2020年より】

2月～4月 「全校オンライン授業」の実施

→全校児童生徒が登校できないことによる

5月～ 「対面・オンライン併用の授業」の実施

→中学部3年より、中学部・小学部3～6年、小学部1～2年と順次登校可能になる。ただし、日本国内にいる新赴任の教員や日本国内から大連に戻れない児童生徒がいるため、対面・オンラインが併用される。

※ZOOMの使用が制限されるなど、状況の変化がある。

10月 新赴任の教員が着任

11月 オンラインで授業に参加する児童生徒はごくわずかに

12月下旬～ 新型コロナウイルスの影響により再び全校臨時休校

※2021年1月現在、児童生徒が登校できないため、全校オンライン授業を実施・継続中

以上の状況から、大連日本人学校の教員は、4つのケース（①課題の提出、②オンラインのみの授業、③対面・オンラインを含む授業、④対面のみの授業）でICTを活用した授業づくりに取り組んできました。どのような教育実践を行ったか、機器・アプリを活用したかについて、教員それぞれが実践記録を記入しました。※【資料3】「ICT実践報告（大連）」参照

また、その実践報告資料から、それぞれの教員の感想や気づきを次のようにまとめました。

< ICTを活用した教育実践から（集約） >

【①課題の提出】

○▲個の見取り・評価は、条件を満たせば可能である。（ただし、難しい部分がある。）

(i) 保護者の協力が必要。

画像を撮り WeChat で送る、テスト実施時には監督をしていただく、など。

(ii) 機器（パソコン・タブレットなど）がそろっている必要がある。

(iii) WeChat・Dingtalk など、個人アカウントの入ったアプリが必要。

→個人情報の流出など、セキュリティー面でのリスク。

▲遅れなどの対応は、保護者の協力が必要。→家庭のサポートが差となって表れる。

【②オンラインのみの授業実践】

○音楽・体育・美術などの芸術系教科、道徳の時間も実施できた。

○教科書がなくとも、パワーポイント資料や画像を画面共有することでカバーできる。

- ZOOM・Dingtalk を活用すると、従来の黒板を使用しての授業ができる。
- ZOOM では、ブレイクアウトセッションにより小グループの話し合いが可能となる。
また、話し合いの進捗状況も把握することができた。
- 画面越しにでも、ある程度少人数であれば考えなどの発表交流も可能である。
少人数であれば、双方向の良さを生かし、児童生徒主体の授業づくりができる。
- モニターを通して、表情を見取ることができる。ある程度は理解度の把握ができた。
- 画像データのやり取りでノート・ワークシートのチェックなど、見取りを行うことができる。
- ZOOM では、レコーディングを事後指導・評価に活用することができた。
- ▲パワーポイントの作成など、準備に時間を要した。特に「音源」などの準備は時間を要した。
- ▲作図の様子など、児童生徒が実際にどのように活動しているか見ることが難しい。
→図形を描く、グラフの作成などは見取りが難しい。
- ▲接続状況に大きく影響される。動画の共有では十分に見ることができない児童生徒もいた。
→日によって違う。雨の日にはつながりにくい傾向。
- ▲児童生徒が使用する機器が違った。(タブレット・スマホ・PCなど)
そのため、接続状況や操作などについて指導上の困難が生じた。
- ▲ノートチェックなどは、保護者の協力が必要。
- ▲歌唱や器楽学習での評価・個の見取りには限界がある。公正な評価が難しい。
- ▲助言・指導のタイミングが難しい。
- ▲言語(国語・英語)に関わり、細かなニュアンスをオンラインで伝えることは難しい場面があった。
- ▲個の見取りには限界がある。
- ▲理科の実験などは、演示実験となるため、学習の動機づけに工夫が必要である
(実験の意義をきちんと説明するなど)
- ▲体育では、オンラインだとできることに限界がある。(それぞれの児童生徒に身体を動かすスペースが必要)
- ▲人数が多くなると、教師主導で進めざるを得ない。
- ▲ZOOMには、途中から使用制限(中国国内)があったため、ホストになれない、ブレイクアウトセッションを使用できないなどの影響が出てしまった。
- ▲ブレイクアウトセッションでは、各グループの様子を同時に見ることができず、十分に把握ができなかった。

【③対面・オンラインの両方を含む授業実践】

- 図形の提示・課題の共通理解がしやすい。(視覚的アプローチ)
- 画像・動画を有効活用できる。
- 一度作ったデータを次年度以降や他学年でも活用できる。
- 紙に印刷しなくてもA3以上の大きさを図形を提示できる。カラー印刷を節約できる。
- iPadでデータを管理し、書き込みなどを行うことで、授業・教材研究に活用できる。
- 板書をしなくてよい分、その時間を有効活用できた。(交流・机間指導)

- 動画などの記録から児童生徒の思考を残すことができ、評価にも活用できる。
- 普段、発言しにくい児童生徒にも発言の機会を与えやすい。
- モニターに児童生徒の顔を映すことで、ともに学んでいることを実感させられる。
- 児童生徒同士、オンライン参加者を気遣い、声かけする様子が見られた。
- 「SDGs 発表会」世界同時授業では、世界各地の児童生徒と交流することができた。
- ロイロノートを活用することで、意見を瞬時に集約・共有することができる。
また、データをいつでも取り出すことができ、評価に活用できる。
- スクリーンショットを活用することで、活動の様子や作品を記録することができた。
- 美術では、Dingtalk で課題を提出することで、十分に評価ができた。
- ZOOMはパワーポイントに直接書き込める機能があり、非常に便利だった。
- ▲拡大して見せることは有効だが、本文の拡大などには限界がある。
- ▲対面とオンラインの児童の見取りに差が出てしまう。(特に個の見取りは難しい)
- ▲オンラインで授業に参加している児童生徒のノートを見ることができない。
- ▲Dingtalk では、画面を共有すると児童生徒の様子・教師の様子が映らなくなってしまう。
→児童の不安、教師が見取れないなどの影響
- ▲オンライン参加の児童生徒に発言させることに時間を要する。(有効ではあるが…)
- ▲テストでは公正な評価が難しい。
- ▲授業準備に時間がかかった。(対面・オンライン両方の準備)
- ▲接続が切れてしまった児童生徒の対応に時間を要し、授業に影響した。
- ▲接続状況や保護者のサポートの状況によって、オンライン授業の環境に差が生じていた。

【④対面のみ授業実践】

- ロイロノートを活用し、授業の中で効率よく個の見取りを充実させることができた。
また、普段から使用することで、児童生徒も手際よくロイロノートを活用することができた。
- ノートとロイロノート (iPad) の併用により、メリハリのある授業づくりができた。
- PDFデータをモニターに表示することにより、フラッシュカードのように提示でき、繰り返し使うことができる。
- ▲ロイロノートは児童生徒1人に1台のiPadがないと授業の中での活用は難しい。
- ▲モニターを活用した一斉学習の場合、個別の見取りは難しい。

【備考より】

- ☆今後の課題としてデジタルとアナログの併用が課題。
→それぞれの長所を生かし切る
→1時間単位・単元単位で「何を見せるか(見せ続けるか)」が大切。
- ☆授業における個の見取りについて、Dingtalkでは不十分。ロイロノートなら対応できる。
→背景として、国際結婚家庭における保護者の支援が難しいという実態がある。
(保護者に日本語での指示・お願いなどが伝わりにくい)
ロイロノートは児童生徒への直接の日本語支援が行いやすく、非常に有効である。

②アプリの比較

大連日本人学校では、オンライン授業において当初は「ZOOM」を活用しました。しかし、中国国内では使用制限がかかったため、「Dingtalk」を主体にオンライン授業を進めるようになりました。この2つのアプリに、以前から保護者との連絡・周知に活用してきた WeChat を加え、3つのアプリの特徴について比較・整理しました。

【各アプリの比較】※2021年2月 中国・大連での状況による

| 機能 | ZOOM | Dingtalk | WeChat (微信) |
|-----------------------|--|--|---|
| 双方向のビデオ通話 | ◎ 映像・音声は最も良い 同時通話は100人まで | ○ 映像・音声はやや粗め 同時通話は302人まで | ○ 映像・音声はやや粗め 同時通話は9人まで |
| 画面共有 (PP など) | ○ PPに書き込めるなど 多くの機能がある 共有中も参加者が見える | △ 動画を共有すると 映像・音声途切れがち 共有中参加者は見えない | × 機能なし |
| グループ分け | ○ ブレイクアウトセッションという機能がある | × (機能なし) | × (機能なし) |
| 中国国内 における 制限の有無 | (制限あり) アカウント取得が難しい ホストに慣れない | (制限なし) | (制限なし) |
| 時間制限 | 無料での使用は40分間 | (制限なし) | (制限なし) |
| 課題などの 提出 | × (機能なし) ※通話中チャットはできる | ○ 様々なデータを送ることが できる(2GBまで) | ○ 画像・PDF・ワードなど を送ることができる |
| その他 特徴など | パスワードや待機室など ビデオ通話(ミーティング) に特化したアプリ | LINEのように 「既読」機能がある やり取りの上で便利 | 手軽ではあるものの セキュリティー面で不安 手軽ゆえに間違えやすい |

教育実践を通して、双方向のビデオ通話という意味で、ZOOMは非常に使いやすいことがわかりました。しかし、中国国内でのZOOMに制限がかかるようになったため、大連日本人学校では制限の少ないDingtalkを代替のアプリとして活用しています。ビデオ通話においては粗く不具合もありますが、児童生徒への連絡・課題のやり取りでは十分に活用できています。一度に2GBという大容量のデータを送ることができる点が便利です。

WeChatは手軽であり、保護者と連絡を取るために非常に便利なツールです。特に、国際結婚家庭の保護者への伝達において、スムーズかつ正確に連絡事項を伝えることができました。一方で、ビデオ通話やチャットのセキュリティーが心配であること、手軽ゆえに送受信を間違

ってしまうことがあることなどから、重要なデータのやり取り・管理には不向きであると考えられます。



オンラインのみの授業



対面・オンライン混合の授業

③ロイロノートについて

オンラインでの授業づくりを進めていく中で、それぞれの児童生徒の学習定着状況やつまづきを見取ることが難しく、効果的な指導・支援が行えないという声が挙がるようになりました。

対面の授業では、児童生徒との対話や机間巡視、ノート・ワークシートのチェックなど、授業者が効率よく「個の見取り」を行うことができます。しかし、オンラインではそういった把握が難しいため、子どもが理解したかどうかを確かめる工夫が必要となりました。

日本語支援においても、双方向のオンラインアプリだけでは、「しっかりと聞きとれていること」「書いたり話したりして、考えや思いを表現できていること」を確認することが困難な状況でした。

そこで、私たちは「ロイロノート」というアプリに着目しました。

(i) ロイロノートの特徴

このロイロノートの特徴について、以下のようにまとめました。

【ロイロノート】

- ◇タブレット (Apple iPad) やパソコンなどで使用
- ◇テキストやPDF、画像・動画といったデータを個別・全体に送ることができる
- ◇各データに書き込み・編集を容易に行うことができる
- ◇児童生徒はデータを教師に送ることができる
 - PDFに書き込んだデータだけではなく、音声データも送ることが可能
- ◇教師は、データについて回収(提出)をスムーズに行うことができる
- ◇回収したデータを個別・全体で共有することが可能
- ◇児童生徒と教師間でのデータのやり取りはリアルタイムで行われる

ロイロノートは、ネット接続の環境が整えば自宅からもログインできるため、オンライン授業の中でも使用が可能です。

もちろん、双方向のビデオ通話を行うアプリは別に必要となりますが、教師のパソコン・タ

タブレットとのやり取りがリアルタイムで行われることから、日本語指導が必要な児童生徒のつまずきや困り感の発見など、授業の中での個の見取りに効果を発揮します。

(ii) ロイロノートの研修・実践 ―青島日本人学校との合同研修など―

このロイロノートは、視覚的アプローチ、児童生徒の考え・思いの共有、学習定着状況・つまずきの見取り、課題の提出（評価）といった観点から、対面授業においても非常に有効であることがわかりました。 ※【資料4】「小学部3学年算数科学習指導案」参照

そこで、大連日本人学校では、ロイロノートの活用についての研修を進めることにしました。すでにロイロノートでの教育実践を進めている教員が多い青島日本人学校とオンラインで実践交流を行い、具体的な活用方法について教員が学ぶ場を設定しました。

さらに、すでに授業実践に取り入れていた本校の2名の教員（小学部：佐藤和彦、中学部：佐藤哲也）が講師となり、小学部・中学部それぞれの活用の実態に合わせて研修を行いました。

中学部では、漢字の読み・書きに課題がある生徒への支援として、ロイロノートを活用しました。この生徒は、中国語と日本語の漢字を混同してしまい、音読や読解、書くことに課題が生じていました。

そこで、ロイロノートを活用して、その生徒の実態に合った漢字の読みに関する学習課題を出しました。その生徒は、自主学習の中で漢字の読みを書いたり、実際に音読したりと、毎日の日課として意欲的に学習課題に取り組みました。また、取り組んだ課題は、PDFデータや音声データで国語科担当の教員に提出、その後チェックを受けた課題を返却され、確実に理解を深めていきました。

漢字の理解が進むにつれて、生徒は自身の成長に自信を抱き、社会科や理科など更なる学習課題に自主的に取り組んでいく様子が見られるようになりました。

校内体制としてタブレット（Apple iPad）の購入を進めるなど、ロイロノートを授業の中で活用する準備が徐々に整ってきました。次年度以降、更に実践を重ねて、より効果的な活用方法を模索していきたいと考えています。

(2) 今年度の状況における新たな課題2「中国語を母国語とする児童生徒への指導」

①中国語を母国語とする児童生徒の入学・編入学

今年度、大連日本人学校には小学部低学年に中国語を母国語として理解力は高いものの、日本語の理解力が十分ではない児童数名がいます。

ここ数年、大連日本人学校では、国際結婚の家庭から中国語を母国語とする児童生徒の入学・編入学が続いています。特に、中学部では小学校まで現地の学校に通学していた生徒が入学してくるケースがよく見られます。中国語と日本語のバイリンガル、更に二か国語に英語を加えたトリリンガルとして、子どもを育てたいという保護者の願いを感じます。

大連日本人学校では、日本語語彙の理解力が高い児童生徒集団の中で、日本語の理解力が弱い数名の児童生徒をどのように支援していくかという一つの課題を抱えていると言えます。

②小学部1学年 生活科の実践(授業者:菊地博之)

小学部1学年では、生活科の中で「せんせいがたとなかよくなろう」という活動に取り組みました。この実践では、今年度入学してきた日本語の語彙力に課題がある児童に対し、自信・自己肯定感を高めつつ日本語の言語能力を育てる実践となりました。

(学校に慣れ始めた「5月」と日本国内に待機していた教員が赴任した「10月」に実施)

☆日本語(バイリンガル)に関わる

●自己肯定感(バイカルチュラル)に関わる

【1】インタビューの準備

- ◇先生方にインタビューをする
- ☆話型をもとに準備を行う



【2】インタビューの実施

- ◇先生方にインタビューを行う。
- ☆(5月)インタビューを動画に記録
- ☆(10月)ワークシートに記録
- ※10月は児童の聞き取りの力が成長していたため、書き取りをさせた



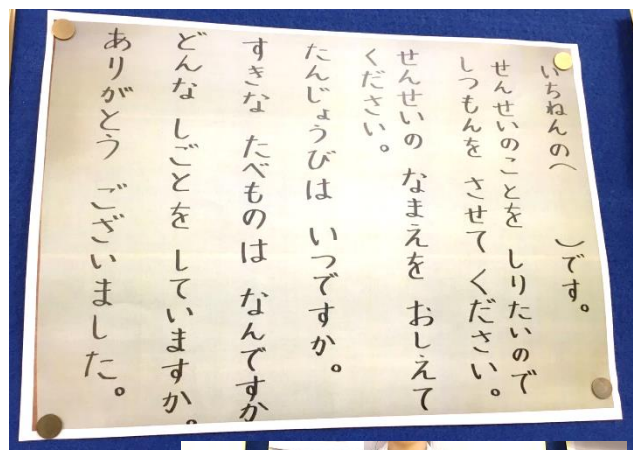
【3】クラスで共有

- ◇インタビューした児童が発表
- ☆●クラス全員がワークシートに記入
- 書き方など教え合いの場面

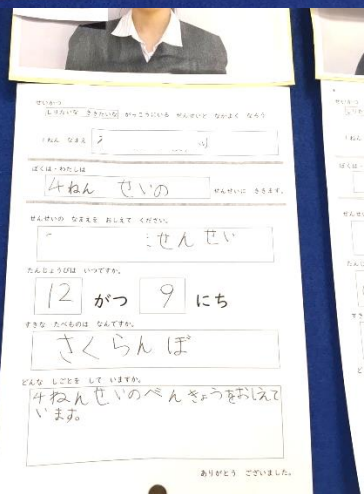


【4】先生方へのお礼

- ◇担当の児童が先生方へお礼を伝える
- 教員からの声かけ(評価)



三段階の他者評価(担任・児童相互・教員)により、児童は強い達成感を実感させる
↓自己肯定感・学習意欲



学んだことを成果として学級に掲示

小学部1学年では、漢字などの反復学習にしっかりと取り組み、日本語の語彙定着のため丁寧な指導を行ってきました。また、学んだことや学習・生活のポイントを効果的に掲示することで、児童が自身の成長を実感しながら学べる環境づくりに努めてきました。

それらの土台に加え、学級の支援的な雰囲気を生かした生活科の実践を経て、それぞれの児童が日本語の理解力を着実に伸ばす様子が見られました。



インタビューでわかったことを発表・共有
動画・画像など視覚的アプローチで支援を行う

③ 中学部における交流活動

各教科の授業実践における成果や各種トレーニングの成果を生かし、中学部では表現や交流の機会の設定に努めてきました。トレーニングで学んだことを実際の場面で活用することで、確かな定着を図ることが期待できるからです。

今年度は、新型コロナウイルスの影響により、外部の企業に出向いたり、外部の方々に来ていただいたりする場面を設定することに大きな制限がありました。しかし、主に総合的な学習の時間の中で、以下のような機会を得ることができました。

(i) 12月12日「大連日本人学校中学部 総合的な学習の時間発表会」

総合的な学習の時間の1年間の集大成として、中学部1～3学年の生徒は「日本と中国(世界)の違い」という大テーマのもと、それぞれの生徒がテーマに沿って調べまとめた成果を発表します。これまでの学習でお世話になった在大連の企業の方々や JICA のの方々、生徒の保護者を招いて、発表会を行いました。今年度、企業との交流は数少ない機会でしたが、講師の方々にお越しいただき、発表を見てもらうことができました。

(ii) 12月16日「世界に発信!! 私達がつくる持続可能な世界～SDGs 発表会～」

蘇州日本人学校の主催で、中国国内の日本人学校や北米・ヨーロッパの補習校、日本の小中高等学校がオンラインの交流に参加し、SDGs(持続可能な開発目標)についての学びや実践報告などの発表交流を行いました。本校からは中学部3学年が参加し、調べ学習でまとめたことを中心に発表を行いました。当日は、新型コロナウイルスの影響により臨時休校となりましたが、自宅からそれぞれがオンラインで接続し、参加することができました。

(iii) 1月27日「北海道北見市立高栄中学校とのオンライン交流会」

北海道北見市立高栄中学校の3学年とオンラインにて、互いに住む地域の様子(環境・生活)や学校生活・行事などについて交流を行いました。大連日本人学校は新型コロナウイルスの影響により臨時休校中でしたが、生徒たちは3学年を中心に3グループに分かれ、各グループでオンラインを活用して発表の準備を進めました。当日もそれぞれ自宅からのオンライン参加となりましたが、素晴らしい発表交流を行うことができました。

中学部では数名、特に日本語の学習言語能力に課題がある生徒がいます。本人たちも聞き取りやスピーチなどを通して、自身の課題に気づき、引け目を感じている様子が見られました。

しかし、ある生徒は、トレーニングを通して「言葉にこだわってしまうために時間がかかる」から「工夫して時間を作り、じっくり取り組めばできる」という自身の特徴にあった改善方法を見つけました。また、ある生徒は、「読むこと」と「書くこと」に大きな課題を感じ、自主学習で課題克服にじっくり取り組んで語彙の理解力を高め、各教科の表現活動の中で学びを活用して定着させ、自信を持って授業に参加するようになる姿が見られました。

中学部では、総合的な学習の時間に「日本と中国（世界）の違い」というテーマで、調べ学習・発表を行いました。中学部全ての生徒が自分なりに推敲を重ね、適切に言葉を選び、構成を工夫して、発表を行うことができました。

テーマ追究のため、在大連の日本企業の方々からお話を聞いたり、調べ学習を通して日本と中国の文化・価値観の違いを捉えたりすることを通して、生徒たちは自分自身の生き方や将来をじっくりと振り返ることができました。その中で、特に中国にルーツをもつ国際結婚家庭の生徒たちは、日本と中国の両方の良さを理解していることに自信を深める様子が見られました。

さらに、SDGsの発表会や北海道の中学校とのオンライン交流では、違いを受け止めた上で自信をもって良さを発揮する生徒たちの姿を目にすることができました。9年間で積み上げた表現活動の実践や自己肯定感を高める実践など、これまでの取組の成果を実感することができました。

5 取組における成果（まとめ）

これまで、AG5の目標である「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発」として、大連日本人学校の取組を整理してきました。

今回の取組では、大連日本人学校における9年間の教育実践の流れを捉えることができたことが、大きな成果の一つでした。日本語支援の観点から見た時、小学部の6年間では教育実践の基盤となる「日本語の学習言語能力」を培う教育活動に取り組んでいました。さらに、支援的な雰囲気やしっかりとした学習規律など、児童に必要な資質・能力を確実に身につける教育実践を6年間で行っていました。その基盤があるからこそ、各教科において日常的に高度な表現活動に取り組んだり、身につけたことを生かして様々な発表・交流などに挑戦したりと、中学部の3年間でより高度な教育実践に臨むことができることを実感しました。

新型コロナウイルスの影響による非常に厳しい状況でも、本校は「子の学びを止めない」を合言葉に、全員で乗り越えてきました。その結果、オンラインを活用しての効果的な教育活動など、本校の財産となる教育実践も積み重ねることができました。さらに、AG5の取組を通して、同じように奮闘している他の日本人学校とも交流できたことも、大きな成果となりました。

次年度は、「劇的に変化する国際社会の中で、生涯にわたって自身の良さを生き生きと発揮できる子どもの育成」というテーマのもと、更なる汎用性を求めつつ、教育実践の完成を目指したいと考えています。